

審査員

小説部門

武蔵野大学名誉教授

三田 誠広、宮川 健郎

武蔵野大学教授

土屋 忍、川西 宏之

俳句部門

武蔵野大学教授

井上 弘美、三浦 一朗

●小説部門 選評

三田 誠広、土屋 忍

【最優秀賞】

青空に

「学校に行きたくない」と「なんとなく」思った「私」は、通学しない時期を経て、高校二年生に進級する。担任の先生からの連絡を受けた「私」は数ヶ月ぶりに登校するが、居心地のいい場所が教室に用意されているはずもない。先生に勧められて「保健室登校」（長期休みの生徒の復帰を支援するための制度）を活用することになる。「私」は、同じ境遇の「きれいな先輩」に恋をして、振られる。「さいあく」という言葉に着地するまでの「私」の心情が、日常のひとこまとしてうまく切り取られている。不登校もひとつの選択肢であり権利である時代においては、教室や家庭と同様に保健室もまた彼ら彼女らの青春の舞台となるのだろう。この時代に特有の状況下で起こり得る普遍的な物語を描いているという点で、評価した。（土屋）

【優秀賞】

いくじなし！

自転車通学の何気ないひとこまを描いた作品だが、自転車が動いていく感じがよくとらえられているだけでなく、短い時間の流れの中に、高校三年生の主人公のそれまでの人生が凝縮されている。「ピッチャー向きじゃないよな」という友人の言葉が、主人公の孤独感を際立たせている。なぜ「ピッチャー向きじゃない」のか、なぜこのタイトルなのかは、充分に説明されていないのだが、理屈ではなく、主人公のわずかな心の動きだけで、この時期の少年にありがちな疎外感、無力感が気配として伝わってくる。（三田）

一句単独の部

【最優秀賞】

オーウェルに時奪われし五月闇

取り合わせの手法を用いて詠まれた作品である。上五の「オーウェル」はイギリスの作家、ジョージ・オーウェルのことであると理解した。「時奪われし」とは、オーウェルの作品に心を奪われて、詠み浸っている状態だろう。作品が何であるかは不明だが、例えばディストピアSF小説『1984年』などが思い浮かぶ。描かれているのは近未来社会の不安である。そこに、取り合わせた「五月闇」は梅雨期の厚い雲に覆われた、昼夜を問わぬ暗さである。取り合わせによって俳句を詠む場合、最も大切なことは季語の効果である。季語が内容と絶妙に響き合うことで、詩的な世界を描くことが出来る。今年の梅雨期は家居を強いられていた時期でもある。なかなか明るい未来が見えて来ない現実を背景としつつ、作品世界に引き込まれる作者像が印象的である。(井上)

季語「五月闇」は、梅雨時の雲に覆われた暗さを言う。その暗さに見合うオーウェルの作品と云えば、すべてが管理された社会の恐ろしさを描いた『1984年』であろうか。「五月闇」の中で、明るい作品ではなく、リアリティのある暗い未来を描く作品に時を忘れて没頭する〈私〉がいる。本好きであれば、こういう読書体験が、逆に先の見通せない今を乗り越える力を自分に与えてくれることを知っているだろう。句のどこにもコロナ禍を思わせる語句はないが、今を乗り越えようとする意志と力が作者の内にあることを感じさせる句である。(三浦)

【優秀賞】

つり革に指一本やつばくらめ

「つり革」に付着するウイルスが感染源として心配された頃、電車の「つり革」に手を触れる人が激減した。それでも、揺れる電車の中でどこにも触れることなく立ち続けるのは難しい。「指一本」には、そんな不安で不安定な日常が象徴されている。一方、春に海を渡ってやってきた「つばくらめ」は、しなやかに空を飛んでいる。

電車の外に広がる風景と、その上に広がる春の空。マスクを離せない私たちの孤独な日々が、切なく切り取られている。(井上)

コロナ禍にある今ならではの句。電車かバスに揺られながら、ウイルス感染に対する漠然とした不安からつり革に触れるのも「指一本」とどめてしまうという、頼りなく心細い〈私〉の心境が巧みに捉えられている。そこに「つばくらめ」を配する発想も一見意外ながら、説得力があつてよい。春に渡ってきて、軽やかに飛び翔ける燕の姿は、いつまでもたらだと自粛を求められる今の閉塞した日常からの解放を思わせ、快い。その姿に憧れ、あるいは心惹かれる〈私〉の姿が思い描かれる好句である。(三浦)

【優秀賞】

節分の夜鬼たちのゆくところ

「節分」は翌日の立春を迎えるために、鬼を打ち払う行事が行われる。「歳時記」を開くと「追儺ついな」
という季語が立項されていて、言い換え季語に「鬼やらひ」「豆撒」「鬼打豆」などがある。日本では「鬼」は同時に「神」であるという側面ももつが、この場合は「災厄をもたらすもの」という意味。しかし、鬼たちは追い払われるのであって、抹殺されるわけではない。だからこそ、「鬼たちのゆくところ」という視点が生きる。節分の頃はまだまだ寒い。寒空に追われる「鬼たち」を思い遣つての一句で、作者の若くしなやかな感性が感じられる。(井上)

着眼点が良い。「鬼は外」と、節分の夜に家々から追い立てられた鬼たちは、その後一体どこに行つて、どうやって夜を明かすのであろう。鬼たちのその後を思いやる視点が優しく、面白い。「節分の夜」の鬼たちの姿が共感的に捉えられていて、節分を詠んだ句として新鮮である。(三浦)

【佳作】

嚙喰の夏の校舎の管楽器

「嚙喰」は「嚙喰」と使うのが正しいので、言葉の使い方という点では問題がある。しかし、「夏の校舎」に響く楽器の音を「管楽器」と具体的に表現した点が良かった。夏という季節のもつ躍動感が、「管楽器」の放つ光とともに、音の煌めきとして伝わってくる。(井上)

「嚙喰」は、管楽器などの音が澄みわたっていることを言う語。難解な漢語だが、夏の校舎を舞台とし、そこに管楽器の音を配することで、暑い中で、管楽器の金属的で涼しげな音の響きが一層際立つ効果を生んでいる。ただし、「嚙喰」はタリ活用の形容動詞で、音が響くのを形容するのであれば「嚙喰」とするのが正しい。「嚙喰」では日本語として不自然で、その点は惜しまれる。(三浦)

【佳作】

白驟雨行く手は見えぬ孤独かな

夏の季語「夕立」は「白雨」とも「驟雨」とも言うが、これをまとめて「白驟雨」と呼ぶのは疑問である。季語は完成された詩の言葉なので、アレンジすることなくそのまま使うのが鉄則。その上で、この作品には「驟雨」に行く手を阻まれて、自身の「行く手」を見失った作者の心情がしっかりと捉えられていると感じた。(井上)

「白驟雨」という語句は聞きなれない。「白雨」は、雲が薄く明るい空から降る雨、夕立を言い、「驟雨」はにわか雨を言う。行く手が白くかすんで見えなほかに激しく降るにわか雨だとすれば、先が見通せない中で立ち尽くすような孤独感とよく見合う。そのイメージの把握はよい。欲を言えば、下五で「孤独」と直接言わずに孤独や不安、心細さを表現できると、よりよい句になる。(三浦)

【佳作】

空蟬に残る湿度よ雲がゆく

「空蟬」は蟬の抜け殻だが、「空蟬」と呼ぶことである情感が生まれる。作者はそこに「湿度」を感じていて、地中に長く在った蟬の命を思っているのだろう。夏空を流れゆく白い雲という「動」と、止まり続ける「空蟬」の「静」という対比によって、「空蟬」が印象的である。(井上)

「空蟬」は晩夏の季語。現し身(うつしみ)、つまりこの世を生きる人間を指して言うこともあるが、この句では蟬の抜け殻のこと。「空蟬」に湿度が残り、空には雲が流れるというところから、雨が上がってからやや時間が経ったあとの夏の日の情景と理解できる。木の幹か、蟬が脱皮できるような物陰で、直接は日が当たらないようなところにある蟬の抜け殻に、少し前に降った雨の余韻を見いだした観察眼が光る句。(三浦)

【佳作】

スクランブル交差点や木の芽晴れ

この作品は665音によって詠まれているので、音読した時のリズム感という点では惜しい。俳句は合計十七音によって詠むのではなく、音読したときの調べも大切である。しかし、「スクランブル交差点」という都会を象徴するような場に対して、「木の芽晴れ」という早春の芽吹きを取り合わせた点が斬新。信号が変わると一斉に動く人と、枝枝から吹き出す芽吹きの強いエネルギーによって、句に躍動感が感じられる。(井上)

「木の芽晴れ」は早春の季語で、芽吹いたばかりの木々の枝を透かしてみる、春の晴れた空を言う。その「木の芽晴れ」を自然豊かな森や公園ではなく、街の真ん中で、多くの人が行き交うスクランブル交差点と取り合わせたのが新鮮で、面白い。早春の青空と、若芽の柔らかい緑色が、街の喧騒にも負けない若々しい生命力を思わせる、力強い句である。(三浦)

【佳作】

鋤入れて蜻蛉の来たる畑かな

単に「耕す」といえば春の季語で、秋に耕すのは「秋耕」。この句は「鋤」を入れて土を起こす人と、そこに飛んで来た「蜻蛉」によって秋耕を捉えている。面白いのは「鋤入れて」と「て」によって、「鋤を入れること」と「蜻蛉がやって来た」という本来無関係な二つを繋いだことで、まるで「蜻蛉」を呼び寄せたような親しげな風景になった。(井上)

蜻蛉は夏にも見かけるものだが、季語としては初秋。この時期に畑に鋤を入れるのは、根菜などの収穫のためであろう。豊かな実りの秋の一コマに、蜻蛉の訪れを組み合わせることで、畑の上に広がる空の広がりを感じられる。のどかな秋の景にふさわしく、大らかで爽やかな句となっている。(三浦)

【佳作】

臘梅の香り纏いし祖父の墓碑

「臘梅」は梅よりも早く咲き、気品ある香りで春の訪れを告げる。墓碑のすぐ傍に「臘梅」が植えられていて、「墓碑」が「臘梅の香り」を纏っているように思えるのだ。この句は「臘梅」「祖父」「墓碑」と漢語を使用したことで韻律が調っていて格調が高く、そこに「祖父」なる人の面影が感じられるのである。（井上）

臘梅は冬の季語。まだ寒い中、その芳香で春の訪れが近いことを教えてくれる。冬の日に墓参したのか、あたりに漂う臘梅の香りに、生前の祖父の姿が思い起こされる。そうした穏やかな小春日和を思わせる句で、好感が持てる。（三浦）

【佳作】

夏の果100光年の闇想ふ

「100光年の闇」は、詩や俳句ではすでに詠まれている題材であり、「想ふ」も表現としてはやや弱い。しかし、「夏の果」という季語によって、自身の今後に思いを馳せつつ、晩夏の星々と、宇宙の深い闇を見上げている作者の姿が見える。（井上）

夏の終わりに夜空を見上げて、「100光年」の彼方へと続く闇に思いをはせる。深い闇に思いをはせることは、どうなるかわからない自分の将来に思いをはせることと重なる。「100光年の闇」は類似的表現が既にありそうだが、夏の終わりに自分の将来への希望と不安が入り交じる心境をうまく句にまとめたところを評価したい。（三浦）

【佳作】

夏祭り行燈色の町の空

今年の夏はコロナ禍によって「夏祭り」も中止、あるいは縮小を余儀なくされた。この作品は、作者の記憶が生み出したコロナ禍以前の光景かもしれないが、「行燈色」という色彩表現が秀抜。和紙を通した、柔らかい橙色の滲むような「町の空」が思われて、一句全体から郷愁が感じられる。（井上）

夏祭りの夜、町の通りに飾られた行燈の光が夜空をぼうつと明るくする。その光の暖かさや柔らかさ、懐かしさが、「行燈色」と表現したことでより生きた。この2年ほどはどこでも夏祭りは実施が難しかっただけに、懐かしさが一層味わい深い。（三浦）

複数句の部

【最優秀賞】

裏庭

立冬から春へと、季節の推移に従ってまとめられた二十句で、豊富な題材が明瞭に切り取られている。表現手法としては一物（季語そのものを詠む方法）による作品が中心で、とりわけ「杭のまはりに薄氷の集まれる」の対象凝視や、「やはらかく若草石を撥ねかへす」などの繊細で確かな描写に注目した。このような、地味な題材を無欲に捉えることが出来るのは、俳句においては「もの」が「見える」ということが大切であることがよく理解されているからだろう。「豹の目の爛々とある吹雪かな」は「目が爛々」の部分が常套で惜しいが、恐らくは動物園の檻の中の「豹」であろう。「吹雪」の中に捉えて、閉塞状況にある野生の輝きを見ている。一方、取り合わせ（季語と何かを組み合わせる方法）では「卓球台を水面と思ふ蝶の昼」の新鮮な感覚や、「ミニカーに乗客のなし春の暮」といった軽いユーモアの感じられる作品にも好感をもった。さらに、「啓蟄のパンに染みゆくミルクかな」では、「啓蟄のパン」として、季語を題材に取り込んで生かす手法や、表題句「裏庭の古巢のことを心から」の心情表現の省略といった点など、さまざま工夫が見られる。すでに俳句によって日常を詠むことに習熟している作者であり、過不足のない表現に瑞々しさが感じられた。（井上）

冬の始まりから春の終わりまで、日常的なものとや情景を題材として、何か一点を凝視するような視点で、ありふれたものを印象鮮明な形で切り取る句作りに特徴がある。「やはらかく若草石を撥ねかへす」は、一見やわらかな若草に意外な力強さを見て取り、生命力溢れる春の表現として秀逸である。「卓球台を水面と思ふ蝶の昼」では、卓球台とその周辺が非日常的で静謐な別世界として捉え直され、印象的な句となっている。「啓蟄のパンに染みゆくミルクかな」は、冬眠していた虫が活動を始める啓蟄に、虫ではなく、「パンに染みゆくミルク」の動きに目を止めているのが独特の視点で、面白い。「冬日差す机の長き図工室」や「校庭の霜へ朝日のまつすぐに」、「杭のまはりに薄氷の集まれる」、「春は詩の季節なりけり窓辺に陽」などは、しっかりと観察眼で日常の中に印象に残る一瞬を捉えて得ている。表題句「裏庭の古巢のことを心から」は、何の「古巢」であるのかということや、「心から」の先にある思いをあえて書かないのだろうが、二十句の中ではやや異質な表現の仕方、違和を感じた。全体に確かな観察と、豊かな感性に基づいた佳句が多く、最優秀賞に推す。（三浦）